

令和7年度 教育懇話会（記録概要）

◇12月13日（土） 参加者7名

【学校教育】

1 地域学習の大切さについて

- 南箕輪村の150年の中に地域学習のヒントがたくさんある
水の獲得の苦労、工夫、大芝高原の歩み、産業構造の推移、飛び地、地域の文化財等
- 分館での夏休みの寺子屋学習の導入（構想段階）
- 総合的な学習の時間の活用
- 教師自身が地域を知ること（南部小 夏の職員研修での地域めぐり）

2 基礎学力の定着について

- 課題解決型の授業の定着の部分の工夫（クリア問題とチャレンジ問題）
- 45分1本勝負（秋田県能代市の授業の姿から）
- 授業がもっとよくなる3観点（ねらい・めりはり・見とどけ）の徹底（H21：長野県教委から発信）
- 算数は、小1の繰り上がりのあるたし算・繰り下がりのあるひき算、小2の九九が基礎基本、
ここを何としてもクリアさせたい、日々継続して暗算できるまで粘り強く指導する

3 教科指導力を高める手立て、温かい学級づくりを実践する教師力の向上は

- 校内研修の奨励
- 校内研修の工夫（学年会（小）、教科会（中）で。各種公開授業での参観を通して）
- 時間的確保（日課表・週時程の工夫）

4 他校や他県への研修制度は

- 長野県教育委員会の取組・・・他県の先進校へ1年間派遣研修⇒中間発表会への参加
- 上伊那教育会の先進校研修視察（約20名で1泊2日程度で実施）
研修報告会の実施、雑誌「上伊那教育」での発信
- 校内で学び合う（授業のうまい先生から学ぶ）

5 登校渋りの見える生徒への早めの支援について

- 放課後、相談対応ができる時間的・精神的ゆとりを生み出す働き方改革
- 相談できる先生との出会い・・・学年担任制の導入等
- 型にはめるスーツケース型の指導ではない、大きく包み込む風呂敷型の指導を心がける
- 大きなおでん鍋のようなクラスに
- 違いを認め合う、それぞれの持ち味を出し合う、お互いのよさと可能性を発揮する

【社会教育】

1 休日の部活動の地域移行について

- 上伊那8市町村で本格的スタートをしているのは南箕輪村だけ
- 吹奏楽部の地域クラブ化は課題が多いが、本村はスムーズに移行できた。
- 指導者の確保は継続して取り組む。
- 兼職兼業の教職員の指導可能時間は、年間120時間を上限としている。
- 美術クラブ：指導してもらわないと活動できないというよりも、むしろ自分たちで目標を決めて取り組む姿勢を大事にしたい。作品展示する機会、コンクールへの応募等、見通しをもって活動

できる環境設定をすれば、生徒たちは自立的に取り組む力はある。
専門的な支援は、オンラインでも可能。工夫のしどころ。

2 発達障がいの子どもたちへの温かい支援がさらにほしい。

我が子は、先生方の愛によって今がある。自立していくまでの支援を大事にしてほしい。
学校教育だけでなく、社会教育からのサポートがあると嬉しい。(例：作業施設への巡回図書館など)

3 逆境的小児期体験（虐待・ネグレクト・家族の機能不全といった深刻なストレスやトラウマ体験）から心に深い傷を負った子どもたちがいるので、こども食堂や地域の中で、温かい声がけやかかわりをしてほしい。

4 神子柴遺跡の学びについて

現地を見学して、説明を聞いて、約1万6000年前の石器・黒曜石の存在に思いを馳せてほしい。
神子柴遺跡は、キラークンテンツ、国宝認定される可能性のある貴重な文化財である。
多くの方にその存在を知ってもらいたい。そのための工夫をしてほしい。

- 神子柴遺跡、伊那市創造館、久保上の平遺跡を巡る見学ツアーの企画
 - 村民センターホワイエでの展示（例：R 8 2月3日～2月26日 土器展示）
 - 体験型の学習会の実施
 - 模型を3Dプリンターで作って、ガチャガチャで売る⇒文化財への興味を持たせる工夫
ハードルを下げて親しみやすくする
- 等、情報発信を工夫していく。

5 教育は、本来、家庭・学校・地域の3者が連携・協力して行うもの。

家庭教育へのアプローチが弱いのではないか。

- PTA活動での研修・・・子育てをすることで、親が親になっていく
- 村報 みなみみのわ A4版ページの子育て情報「あたたかな まなざしで」の活用
- 共育の日（毎月23日）での呼びかけ

6 地域の中で子どもを育てる方向はよいが、どうやって育てるのか、個人情報の保護による情報不足

- 関係者、大人の社会力を少しずつ発揮していく。
- 役を引きうけることで身につく責任感等を大事にする
- リーダーシップをとる経験とフォロアーシップを発揮して支えていく経験の両方を大事にしていく

7 キャリア教育の現状は、小さい頃から様々な仕事・職業について考える機会を大事にしてほしい。

- 中学校での2日間の職場体験学習
- 事前学習としての「大人と語る会」の実施
- 南部小での30周年記念イベントとしてのキャリア・フェスの実践
(PTA活動の活性化の起爆剤になる。赤穂小でも3年前からPTAの実行委員会で企画・運営)
※盛り上げる活動が魅力的、できる範囲で協力していく仕組みが大事。

◇12月20日（土） 参加者15名

【学校教育】

1 南箕輪中学校の合唱が充実している。合唱の音が響く学校、うれしい。中学生のあいさつもよい。

○今年の若竹祭のクラス合唱、学年合唱、すばらしかった。上級生にいくにつれて合唱が充実。

○それは、学校が安定して1つの証。中3が頑張る、中2はその背中を見て、来年は自分たちがという気持ちになる。中1は先輩たちの姿に憧れる。この流れが、1つのめざしたい学校の姿。

○朝の見守りをしていると、小学生と中学生が談笑しながら登校する姿があり、微笑ましい。小1の手を引いて登校する中学生の姿、小1にとっては頼もしいお兄さん、お姉さんであり、中学生にとっては、小1の児童を見守りながら、責任をもって登校する気持ちの醸成につながっている。共に良き姿なり。

2 日々の授業の充実とあったが、具体的なサポートは？

○三校の研究主任会での、校内研究・校内研修に関する情報交換や意見交換を通して、各校の授業づくりの推進についてサポート。

○授業づくりに関する、各種情報の提供。

（文科省や県教委、他市町村や他県の取組状況、研究者の知見、各校の教育実践等）

○「共に学び合う」授業の推進・・・具体的な事例を通して、教職員が学び合うことを推奨したい。

例 小2の算数

「1列に並んでいます。Bさんは、前から5番目、後ろから4番目でした。1列に並んでいるのは何人でしょうか？」

◇ $5 + 4 = 9$ 人・・・絵を書いて確かめてみよう！・・・「あれっ？ 8人だ。どうして？」

となると、課題が座る。

他の場合でも調べてみよう。・・・前から3番目、後ろから3番め→自分の指で確認→5人
やっぱり、1人少ないぞ。

課題「どうして、1少ないのか」

※どうして、そうなるのか？といった問いを見出して、みんなで考え合っていく、
いくつかのやり方が出てきたら、「比べること」を通して、関連づけたり、検討したり、
分類したり、見方を変えたりする中から「深い学び」へ誘うことができる。そんな授業を目指したい。

3 子どもたちの姿も多様化している。中には自己肯定感がもてずに、自分らしさを発揮できない子どももいる。 そんな子どもたちのために、どんな支援ができそうか、支援体制について。

○一人ひとりの子どもたちの実態にどれだけ柔軟に寄り添えるか。自分の指導観「スーツケース」に固執して、それを子どもたちに押し付けたり、その中に子どもたちを詰めこもうとするのではなく、大きな風呂敷で、一人ひとりの子どもの個々の状況に合わせて、やわらかく包み込み、情のある教師力を身につけたい。

○お互いの存在を認め合い、よさと可能性を引き出し伸ばす、そんな子ども理解を根底において「おでん鍋」のような「温かい学級づくり」を進めて、一人ひとりの子どもの存在を大切にしていきたい。

4 サポートする先生のかかわり方が大事ではないか。また、担任との関係も大事。

学校外からのサポートスタッフが気持ちよく参加できる学校の雰囲気も大事。

○村のサポート体制・・・他市町村に比べて、特別支援教育支援員、介助員とも手厚く配置している。
今後は、担任と支援員等との連携をどう充実させていくか。1つのTT（ティーム・ティーチング）であるので、導入時・見通しをもつ時（子どもの声を代弁）・個人追究の時（分担して様子を把握）・定着の時（担任：理解が十分でない子どもを集めて黒板の前での補充指導。支援員：他の子どもたちの状況を

見て、〇つけをしながら、励ましの声がけ「いいね」「グッド!」「そうそう、その考え方だね」等の支援員の動きが重要となる。担任との事前・事後の打ち合わせ等を通じて、お互いの動きを確認していきたい。そういったやりとりを通して相互の信頼関係を深めたい。

○学校支援スタッフの方とのコミュニケーションは大事であるので、その場その場のあいさつ等に気を配り、学校支援スタッフの皆さんが気持ちよく活動できる環境づくりに努めたい。

5 県教委は、小1での25人学級の方を公表。そのねらいは？

かつては、45人学級、いろんな個性の集まりであったが、それなりに成長していった。

25人学級にしていくのは、平均的な子どもを育てることをねらっているのか？

○低学年、特に小1では、学校生活や授業に慣れるに時間もかかる。また、様々な子どもの状況にきめ細やかに対応するには、小人数の環境がより適しているという考え方からではないか。

※自分自身も、小1～3までは、20人学級（分校のため、分校の1年生のクラス名は1年9組であった。本校が8組までであったため）今考えてみると、最先端の少人数学級であった。

小4～6は45人学級（本校に統合されたため）。当時の赤穂小は、各学年8学級で1学年約360人を8人の担任集団で指導していた。（今の状況を考えると、すごいこと）

全校児童は2000人を超えていた。私の経験からも、小1はある程度、学級の規模が小さい方がよいと思います。今後も県教委の動向を注視したい。

○小規模の学級にして、平均的な子どもを育てるのか？という質問ですが、あくまでも、一人ひとりのよさを伸ばすために、きめ細やかな対応・支援をしていくというのが導入するねらいだと思います。

○現在、長野県では、中3まで35人規模学級であり、全国に先駆けて実施している状況です。

35人なら1学級、36人なら2学級で1学級あたり18人というように、35X+1で、X学級から(X+1)学級となって、1学級あたりの児童生徒数は少なくなります。この境界についてはその年の児童生徒数が関係してくるので、1学級あたりの児童生徒数が35人に近い場合もあれば30人前後になる場合もあります。

○小学校の入学時に、1年1組37人と35人をオーバーしていてびっくりしたという声ですが、この中には、特別支援学級の児童も含まれています。伊那養護学校の副学籍の児童も含まれる場合もあり、35人を超えた表示になる場合もあるということです。

【社会教育】

1 大芝高原内に、文化活動ができる環境整備の推進を！

ピアノが1台あれば、合唱ができる。そういったイベントができる環境づくりを！

○観光森林課と連携していく。（平野さん提供のピアノのその後の確認）

○こども館・・・電子ピアノを設置。（常に自動演奏）、希望者は自由に演奏できる環境。

○村民センターホワイエ・・・1月下旬にピアノを設置予定。ロビーコンサートも可能。

伊那ケーブルTV「えがおがすてき みなみみのわ」でも紹介予定。

2 休日部活動の地域展開について

生徒のニーズも多様化している。中学校規模単位の地域クラブと、上伊那郡内で活動しているクラブとが混在している状況。後者のクラブの場合、課題として、①活動場所の確保が難しい ②使用料の減免が受けにくい、③現地までの送迎 等があるので、上伊那8市町村で連携した対応ができないか。

○ 南箕輪中学校の休日の地域クラブの展開：R7年4月からスタート。上伊那8市町村で本格的スタートをしているのは南箕輪村だけ。地域の皆さんのご理解とご協力のおかげ。吹奏楽部の地域クラブ化は課題が多いが、本村はスムーズに移行できた。

- 村の地域クラブは、わくわくクラブの中学生クラブに登録しているので、活動場所の確保・使用料の8割減免と2割補助で、実質、負担なしで利用できるメリットがある。わくわくクラブとの連携を大事に考えたい。
- 広域のクラブについては、郡内における状況の確認を十分に行った上で、諸課題に関する対応を考えていくことになる。南信教育事務所の担当主事にこの情報伝え、広域クラブの全体像の把握に努めたい。子どもたちにとってよりよい環境になるように考えたい。

3 3つの課題について

(1) 核家族化の進行による、基本的なしつけ、道徳教育の低下、地域コミュニティに関する意識の変化

- ・ お年寄りの「生活の知恵」が子ども達に伝わっていない。
- ・ 「自治会へなぜ入らないといけないのか」という声
- ・ 子育てに関する情報が少なくなっている、家庭教育の質が低下している。
- お互いの社会力の発揮に関わる問題。
 - ※ 社会力・・・他者を理解し、良好な関係を築き、よりよい社会を創っていかうとする力
- 子育てに関する情報発信・・・村報 みなみみのわ での「あたたかい まなざしで」
- 基本的なしつけについては、あらゆる機会で話題にしたい
 - 「嘘をつかない、間違ったら謝る、意地悪をしない、いじめをしない、悪口・陰口を言わない」
- 「共育」クローバープランを繰り返し推奨していく
 - ☐ 本を読む ☐ 汗を流す ☐ あいさつ・声がけをする ☐ スイッチを切る
- 人は、人と人の中で生きていくもの。人を傷つけたり、無関心でいたりするのではなく、支えたり支えられたりする関係を大事にしたい・

(2) 様々な面における多様化（夫婦別姓、性の多様化等）が進む中、何が普通かわからない時代。

人としての生き方がわかりにくくなっているのか。

- 基本は、人としての自立、その軸を大事にしたい。
 - 例 自立した生徒の姿
 - A：自分と向き合うことのできる生徒
 - B：仲間との関係を築くことのできる生徒
 - C：社会とのつながりを自覚できる生徒
- 若者が、これからの自分の人生の歩み方について参考になる先人の言葉や心の杖言葉を紹介したい。
 - 例 村民センター2階 「プロGRESS・ルーム」の廊下の1コーナーにて
 - コーナーの名称「読むことは築くこと 考えることは創ること」（新田次郎）
 - 具体的な掲示物
 - ☐ 竜馬が行く（司馬遼太郎が「竜馬がゆく」の中で表現した「若者の生き方」に参考になる言葉）
 - ☐ 「書くことのみその人を主体的にする」（朝日新聞 天声人語を書き写すガッツ石松の姿）
 - ☐ 先人の教え
 - 「人は人 吾は吾なり とにかくに 吾行く道を 吾は行くなり」（西田幾多郎）
 - 「あれを見よ 深山の桜 咲きにけり 真心尽くせ 人しらずとも」
 - 「為せば成る 為さねば成らぬ 何事も 成らぬは 人の 為さぬなりけり」（上杉 鷹山）
 - ☐ 勇気づけてくれる詩 「ああ 遠くの空は 晴れている」（加藤 明治）

(3) これからの教育のあり方について（文科省の学習指導要領にも落とし込まれている内容）

冒頭の教育長の考え方の方向と、バカロレア教育、リベラルアーツとは、合致しているので、「幅広い知識」と「思考力の育成（やわらかな知性）」を身につけていく教育を、ぜひ体系化してほしい。

※バカロレア教育・・・スイス発祥の国際的な教育プログラムで、単なる知識の暗記ではなく、探究心、批判的思考力、論理的思考力、国際的視野を育み、世界共通の基準で「学び方」を学びことをめざす。

※リベラルアーツ・・・「人間を自由にするための学問」という意味で、特定の専門分野に偏らず、人文科学・社会科学・自然科学など幅広い分野を横断的に学ぶことで、論理的な思考力や批判的思考力、コミュニケーション能力といった総合的な教養と問題解決能力を育む教育理念・学問分野です。複雑な社会で主体的に判断し、行動できる人材育成のために注目されている。「幅広い知識」と「思考力の育成（やわらかな知性）」

○「知識・技能」の確実な習得と、「思考力・判断力・表現力」の育成、「学びに向かう力、人間性」の伸長の3つの柱と関連していると思います。特に3番めの「学びに向かう力、人間性」については、主体的に学ぶ姿勢（意欲・粘り強さ）に加え、感性・やさしさ・思いやり・多様性を尊重し協働する力、メタ認知（自己の思考を客観する力）などの「非認知能力」を大事に捉えたいと思います。

○上記の内容を、日々の教育活動の中でどれだけ意識して実践できるか、具体化に向けて取り組みたいと思います。

4 地域の総合力が低下している。こどもに対しても、高齢者に対しても、いたわり・思いやることが大切 関係機関や地域の様々な活動団体・活動サークルをつないだネットワークを構築してほしい。

○大事な指摘。

○11月30日「R7 地域支え合いフォーラム」の企画はその1つ。お互いの存在と活動内容、人を知り、つながるイベント。関係者の思いを共有し、連携し、協働していくネットワークは大事である。関係部署との連携を図りながら縦糸、横糸、ナナメの糸を織り込んで、きめ細やかなネットの構築を考えたい。

5 南部小の存在が、どうしても横に置かれがち。そのあたりの対応をお願いしたい。

○小中連携と共に、小小連携を具体化したい。小4あたりから、外国語活動や体育の授業を合同で行い、いずれ中学校で一緒になるお互いの存在を知る機会を設けたい。お互いの学校を紹介し合う機会もとりた。 (直接交流の場合、オンライン交流も含めて)

6 12月議会を傍聴、教育長の「いじめ・不登校」問題に対する答弁に感動して、本日参加した。

こどもたちの教育を担う教師の存在が大きい。若手の教師を育てていくことが肝要。その手立てについて

○ 制度的には、2つ。

1つは初任者指導教諭がついて個別に支援（6人の初任者にベテラン教諭が1人ついてる）

2つには、メンターチームでの支援（経験豊富な先輩が、授業づくりや学級経営、保護者対応、児童生徒理解、生徒指導、各種業務への対応、メンタルの相談等）

○ 「学び続ける教師」になる心構えを持つ、教師としての転換点を大事にする。

【転換点をもつ場面】・・・具体的に紹介していきたい。

- ・子どもの声、保護者の訴え等から、自分自身のあり方を問われた時
- ・先輩や同僚との会話、アドバイスから
- ・管理職の話から
- ・先人の言葉から

※ 尾形の場合は、1校めの2年目の小山君の生活記録「数学の授業、尾形先生は元気はいいが、時々何を問われているかわからない時がある」の一文から自らの教材研究不足を実感。

もう1つは、3人めの校長、藤本先生との出会い

「鍛え 伸ばし 見守ってくれたF校長」～私を育ててくれた校長～ シリーズ参照

鍛え 伸ばし 見守ってくれたF校長



初任の山間地のT中学校で、特別支援学級担任を3年、通常学級担任を3年経験させていただいた。F校長との出会いは、初任5年目のことであった。

2年生の担任として張り切っていた私の授業を、授業参観日の時にチラッと覗いていったあと、「元気はいいが、相変わらず教師主導の授業をしているな。もう少し、生徒が追究する授業はできないのかね」と指導いただいた。教育雑誌を読んだり、先輩と授業づくりについて話したりはしていたが、これという自分の授業スタイルをもてないでいた時であった。そんな授業を見られて、「我流の指導ではだめだぞ」という親心からの指摘であった。

5月始め、職員室で「一度附属中学校の公開授業を見に行ってきたらどうかね」と声をかけていただいた。初めて参観した附属中の授業から刺激を受けたのは言うまでもない。帰校後その様子をF校長に報告すると、「世の中は広い。自己研修を大事にし、子どもが自ら追究する授業を心がけなさい」と諭していただいた。その後も、空き時間に職員室で仕事をしていると、「校長室へお茶を飲みに来なさい」と時々指導をいただく機会があった。日々発行していた学級通信を読んだ上で、我が学級の現状について尋ねられ、個と集団の成長過程や、担任の思いと生徒の心情のずれや重なりについて、具体的かつ示唆に富んだ話を交えながら指導していただいた。はじめは煙たがっていた我々若手教員も、いつしかこの校長室での指導が楽しみになっていった。20分程度のこの時間が何よりの研修であったことは言うまでもない。「君たちは、子どもを捉えるとき、どうしてもある場面での言動で捉えてしまう。子どもはいろんな場面で、多くの人との関係の中で様々な動きをする。各教科、清掃、委員会、休み時間、生活記録、何気ない会話の中でのやりとり等の中で見られる、その子らしさを見出していかなければならない」と、飲み会の二次会で、猪口やとっくり、小皿を並べて、割り箸でそれらを貫く仕草で教えていただいた。

翌年、初任6年目にして初めて数学の校内研究授業を12月にさせていただく機会を得た。その5月、「数学の授業は数学の内容を教えるだけでよいのか。一人一人の生徒を活かす授業はできないのか。半年後の数学の研究授業では、ぜひとも教科指導を通した生徒指導を行うように」との課題をいただいた。数学の学習課題を、生徒が自ら追究しながら、いかにして解決させるかという視点でばかり見ていた自分には新たなテーマであった。さらに「この際に、生徒理解の基本を勉強する」といい。来週、信濃教育会教育研究所の加藤 伸先生のご指導を30分いただけるように話をしあるから、研究主任と行ってきなさい」と話された。若手を鍛えよう、伸ばそうという思いと、そのためには研修が必要だ、その場所も用意したぞという心遣いが伝わってきて熱いものがこみ上げてきた。加藤先生からは、人間関係づくりにおいて気になる対象生を徹底的に観察し、その子の事実を集め、すぐに解釈はせずに、3ヶ月ほど経ってから、事実を丁寧に丁寧に合わせながら、その子なりのあるがままの姿をとらえ、その状況に応じた指導をしていくとよいという話をお聞きした。日々目に映る生徒の苦になること、気になることに口を出しては指導していた自分には、なかなか大変な取組であったが、とにかく実践してみた。

対象性としたT生は、わからないことを周囲に悟られまいとわかったふりをしてその場を過ごしてしまう傾向があった。ところが、T生の事実を累積していく中から、T生らしさが徐々に増えてきた。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①自分の興味・関心のあることについては執拗にやり、時には自分勝手な行動につながる。②自分の自信あるものについてプライドを傷つけられると敏感に反応するが、何気ない会話など、具体の中で自分の気持ちを伝えるのは不得手である。③動く場所と機会を与えられると意欲的に動くが、自分からはその場になかなか溶け込めない。④開かれた人間関係のもとでなら、自分の気持ちを素直に、時にはストレートに表現する。 |
|--|

T生の気になる部分を変えようとするのではなく、T生らしさを活かす学習環境をいかに作るか、少しずつ考えている自分がそこにいた。半年後、T生への指導の手だてを「主体的に前進したいという向上心をもっているが、人との関わりの中や具体の中の機微で、自分の思いを自己処理することが不得手のT生に、自分を出して友とかかわりを持てる場面、人的環境を準備すれば主体的な学習態度に変わっていくだろう」とし、人間関係に配慮した3～6人のグループ学習を取り入れて行った三平方の定理の利用の授業は、自分にとっての授業づくりの原点になっている。

周囲とのやりとりを心地よく感じながら、数学の課題を解決しようとするT生の姿は私に、授業を通して子どものよさや可能性をいかに引き出すことが大切であるかを印象強く教えてくれた。「人間関係の機微をとらえた授業が少しはできるようになったな」とのF校長の一言から、子どもの気持ちの微妙なおもむきを捉えずして、授業ができるかという指導観を学んだ気がする。鍛え 伸ばし 見守ってくれたF校長との出会いに感謝するばかりである。

(文責 教学指導課 主幹指導主事 尾形 浩)